

【ポスター発表】

「障害」を含めた多文化共生アプローチに関する一考察

－「身体文化」概念の導入と反抑圧的実践の必要性－

○ 関西学院大学 松岡 克尚 (1808)

宮崎 康支 (関西学院大学客員研究員・9599)、原 順子 (四天王寺大学・1134)

キーワード：超多様性・身体文化 (インペアメント文化)・反抑圧的実践

1. 研究目的

第70回大会(2022年)において、“diversification of diversity”を意味する「超多様性」概念(Vertovec 2007)をソーシャルワークの土壌に移植して論じる可能性を報告した。この概念は移民研究から導出されたものであり、ソーシャルワークにおいてもその位置づけは主にエスニシティに軸が置かれ、それ以外も含めた多様性の議論はなされていなかった。日本では、多文化共生の政策的な位置づけられ方も影響し、多様性とは「文化の相違」の意味に還元されがちであり、ソーシャルワークの関心もこの意味での差異の理解を自らのコンピテンスに含有することに置かれていた点は否めない。

Boccagni(2015)は移民の困難さを理解する際に、エスニシティへの偏重を批判する中で「過剰な文化化」(p.608)を戒め、エスニシティや文化的差異を「脱本質化させるレンズ」(p.611)としての期待を超多様性概念に寄せている。換言すれば、超多様性概念によって、「文化的な差異」の多様性のみでもって多文化共生を語るアプローチが有する文化偏重の「陥穽」を回避し、SOGIEや身体における多様性もまた同一地平で論じることを可能にすることができる点に、ソーシャルワークにおける超多様性概念の意義を引き出した。

しかし、Boccagniの上記見解に同意しつつも、身体が多様性についてはその取り扱いにより慎重さが求められるという批判は可能である。というのも、身体が多様性は容易に医学的な序列化に変換し得るというアポリアが存在しているからである。そこで本報告では、この意味での身体における優劣性を回避しつつ、身体が多様性を多文化共生の地平に引き上げるための手段として、身体が多様性を身体が紡ぐ文化の多様性に置き換え、「インペアメント文化」とそこから発展させた「身体文化」の考え方を導入することの可能性を論じる。同時に、ソーシャルワークが多文化共生を実現させる上では、「差異の尊重」のみに留まるのではなく、多様性の中に必然的に存在する多数派と少数派間の権力関係、抑圧・被抑圧関係の超克のためにも反抑圧的実践の導入が必要になることを強調してみる。

なお、この報告はJSPS科研費(22K01998)から助成を受けたものである。

2. 研究の視点および方法

先行研究レビューを実施した。第一に、本報告における鍵概念の1つである「超多様性」について、類似概念であるインターセクショナルリティとの関連が問題になることから、両者の相違点を検討し、もって本報告なりの差別化を試みた。

もう1つの鍵概念である「インペアメント文化」とは、インペアメントのある身体が環境との交互作用によって生み出した対環境戦略であり、身体のみならず当該環境の影響を受けた「生きる戦略」を意味している（松岡ほか 2019）。超多様性の中に「障害」を位置づけ、かつそれによって医学的な身体の序列化を回避することを、このインペアメント文化の概念をいかに発展させていくことで果たせられ得るか、という観点から検討を行った。

3. 倫理的配慮

本報告は理論研究であり、「日本社会福祉学会研究倫理規程に基づくガイドライン」の「引用」の内容を順守し、特に自説と他説を峻別した。COIは存在しない。

4. 研究結果

インターセクショナリティと超多様性は、属性間の交互作用に着目している点では共通性がある一方で、前者は社会的抑圧に抵抗すべく、その背景にある交互作用に着目した概念であり、後者は社会集団内の交互作用の存在をむしろ分析の出発点とし、政策や実践への示唆を得ようとしたという点に相違があると結論づけた。

次にインペアメント文化の考え方を更に延長させると、インペアメントの有無に関係なくあらゆる身体は、その身体性に応じた「文化」を有することに気づくことになるだろう。これを総称するとすれば、社会学で言われる「身体文化」ということになるが、様々なインペアメント文化とはそうした身体文化の多様性の一表現にすぎないことになる。そして同時に、健常者とされる人々が紡ぐ文化もまた多様な身体文化の中に包摂されてしまい、文化という点では様々なインペアメント文化と同列化が可能となる。こうして、優劣関係を伴った「障害／健常」という二元性を、身体の序列化に紐つけられない「身体文化の多様性」へと発展解消させ、それを軸にソーシャルワークの新しい多文化共生の在り方を論じることが可能となると結論付けた。

5. 考察

超多様性の中に「身体文化」を含ませ、身体文化もまた多様であるという解釈によって、「障害」に付きまとう医学的優劣性を解消し得るとしても、しかし実際には「障害者／健常者」間には「被支配／支配」の権力関係が横たわっていることは否定できない。ソーシャルワークの多文化共生の実践は、必然的に反抑圧の性格を帯びざるを得ないと考える。

【文献】

- Boccagni, P. (2015). "(Super)diversity and the migration-social work nexus: A new lens on the field of access and inclusion?" *Ethnic and Racial Studies*, 38 (4), 608-620.
- 松岡克尚・原順子・宮崎康支 (2019)「ソーシャルワークにおける『身体』の位置付に関する考察」日本社会福祉学会第67回大会、2019年9月22日、大分大学。
- Vertovec, S. (2007) "Super-diversity and Its Implications," *Ethnic and Racial Studies*, 30(6): 1024-1054. (=齋藤僚介・尾藤央延 (訳), 2020, 「スーパーダイバーシティとその含意」, 『理論と動態』, 13: 68-97).